

第13章

スクランプリングの獲得*

杉崎 敏司・村杉 恵子

三重大学 南山大学

日本語にはスクランプリング (scrambling) と呼ばれる移動操作が存在し、その適用によって (A) の語順から (B) の語順が、さらに (C) の語順から (D) の語順が得られると考えられている。

- (A) ケンがその寿司を食べた。
- (B) その寿司をケンが食べた。
- (C) ケンが [マリがその寿司を食べたと] 主張した。
- (D) その寿司をケンが [マリが食べたと] 主張した。

(B) のような単一の節内で名詞句を移動させるスクランプリングは短距離スクランプリングと呼ばれ、(D) のような節の境界を超えて名詞句を移動させるスクランプリングは長距離スクランプリングと呼ばれている。日本語を母語とする幼児はいつどのようにしてこれら2種類のスクランプリングを獲得するのだろうか。もし母語獲得に生得的な仕組みが関与しているのであれば、幼児はこれらのスクランプリングに関して早い段階から成人と同質の知識を持つことが予測されるが、この予測は妥当なものであろうか。本章では、日本語を母語とする幼児を対象とした実験の実施や、幼児に向けられた成人の発話の分析を通してこれらの問いに答えようとした主要な研究を整理し、その成果について概観する。

* 本章の執筆に際して、宮本陽一氏、斎藤衛氏、川村知子氏、ならびに初稿に対する2名の匿名査読者から貴重なコメント・示唆を頂いた。ここに謝意を表する。

本章の構成

第1部では、日本語の自由語順現象の背後にあるスクランプリングと呼ばれる移動操作について、日本語を母語する幼児が成人と同質の知識を持つことを実験によって明らかにした研究について整理する。第2部では、スクランプリングの適用によって移動した名詞句が元位置に残すと仮定される痕跡に関しても、日本語を母語とする幼児が成人と同質の知識を持つことを示した研究について概観する。

第1部 日本語におけるスクランプリングの獲得

1. 日本語のスクランプリング

日本語が示す主要な性質の1つは、英語などの言語とは異なり、語順が比較的自由であるという性質である。例えば、(1) および (2) の例が示すように、日本語では同じ節の中にある通常の名詞句や *wh* 句を前置することが可能である (原田 (1977), Saito (1985) など)。また、(3) および (4) の例が示すように、これらの句を節の境界を越えて文頭に前置することも可能である (Saito (1989, 1992) など)。

- (1) a. ケンがその寿司を食べた。
b. その寿司をケンが食べた。
- (2) a. ケンが何を食べましたか。
b. 何をケンが食べましたか。
- (3) a. ケンは [マリがその寿司を食べたと] 主張した。
b. その寿司をケンは [マリが食べたと] 主張した。
- (4) a. ケンは [マリが何を食べたか] 知っている。
b. ?何をケンは [マリが食べたか] 知っている。

高野 (本書)、瀧田 (本書) で議論されているように、日本語に関する理論的研究では、日本語の自由語順現象にはスクランプリング (scrambling) という移動操作が関与しており、日本語において自由な語順が可能なのは (5) や (6) に例示されるようなスクランプリングが存在するためであると考えられている。

- (5) その寿司をケンが 食べた。

(6) その寿司をケンが [マリが 食べた] 主張した。

(5) のように、要素を同じ節の文頭へ移動させるスクランプリングは短距離スクランプリング (short-distance scrambling) と呼ばれ、(6) のように、節の境界を越えて、埋め込み節内から主節へと要素を移動させるスクランプリングは長距離スクランプリング (long-distance scrambling) と呼ばれる。以下、第1部では、日本語を母語とする幼児がいつ頃にこれら2種類のスクランプリングを獲得するかについて調査した研究を概観する。

2. 短距離スクランプリングの獲得

2.1. Hayashibe (1975) による実験研究

日本語における短距離スクランプリングの獲得に関する初期の研究の一例として、Hayashibe (1975) を挙げるができる。Hayashibe (1975) の研究では、3歳4か月から5歳11か月までの日本語を母語とする幼児30名を対象に、これらの幼児が(1a)のような「～が～を動詞」の語順を持つ文と(1b)のような「～を～が動詞」の語順を持つ文を正しく理解できるかどうかについて、実験を用いた調査が行われた。この実験では、カメ・アヒル・ネコ・パトカーなどのおもちゃが幼児の前に置かれ、各幼児はこれらを用いて、与えられた文の通りに動作を行うという動作法 (act-out task) が用いられた。調査は比較的静かな部屋で1人ずつ実施された。

テスト文は24文からなり、その内の16文は(7)のように主語・目的語のいずれもが生物を指す名詞句となっている文で、残りの8文は(8)のように目的語が無生物を指す名詞句となっている文であった。また、これらの16文および8文のうち、それぞれ半数が「～が～を動詞」の語順で提示され、残りの半数が「～を～が動詞」の語順で提示された。

(7) a. カメがアヒルを押す

b. アヒルをカメが押す

(8) a. ネコが箱を開ける

b. 箱をネコが開ける

主語・目的語のいずれもが生物を指す名詞句となっている(7)のような文では、(8)のような無生物を指す目的語を含む文とは異なり、名詞句の意味内

容のみからはどちらが主語でどちらが目的語であるかを定めることができないため、これらの文を正しく理解するためには、「が」や「を」といった格助詞に注目して語順を正確に把握する必要がある。これら16文に関して得られた結果を整理すると、主に(9)に整理した4パターンが観察された。

(9) a. グループA:

16文のうち、誤った反応を2文以下においてしか示さなかった幼児

b. グループB:

「～が～を動詞」の語順を持つ8文に対しては誤った反応を1文以下においてしか示さなかった一方で、「～を～が動詞」の語順を持つ8文に対しては誤った反応を3文以上において示した幼児

c. グループC:

「～が～を動詞」の語順を持つ文と「～を～が動詞」の語順を持つ文の両方において、3文以上に対して誤った反応を示した幼児

d. グループD:

16文のうち、少なくとも1つの文に対して「自己中心的な反応」を示した幼児
(「自己中心的な反応」とは、幼児自身が動作主となり、例えば「カメをアヒルが押す」という文に対して「カメとアヒルの両方を押す」という動作を行った反応を指す。)

(9) に示した4パターンのそれぞれについて、当てはまった幼児の人数および平均年齢は表1の通りである。

	幼児の人数	平均年齢
グループA	7	5;00
グループB	10	4;09
グループC	6	4;00
グループD	5	3;07

(歳; 月)

表1: Hayashibe (1975) による実験の結果

表1に示される通り、最も多くの幼児が示した反応はグループBの反応、つまり「～が～を動詞」の語順を持つ文は正しく解釈できるのに対し、「～を～が動詞」の語順を持つ文に対しては誤った解釈を与えてしまうという反応であった。これらの幼児は、(7b)のような「～を～が動詞」の語順を持つ文が

与えられた際、最初の名詞句を動作主、2番目の名詞句を被動作主と解釈し、「アヒルがカメを押す」という動作を行った。このような反応を説明する1つの可能性は、日本語獲得における4～5歳頃には、短距離スクランプリングがまだ獲得されていない段階が存在し、それゆえ幼児は短距離スクランプリングを含む「～を～が動詞」の語順を持つ文を正しく理解することができず、最初の名詞句を動作主、2番目の名詞句を被動作主として解釈し、「～が～を動詞」の語順を持つかのような動作を行ってしまう可能性である。この可能性が正しければ、短距離スクランプリングはその獲得に生後4～5年ほどかかってしまう属性であるということになる。CHILDES データベース (MacWhinney (2000)) と呼ばれる自然発話データベースに取められた英語を母語とする幼児の自然発話において、日本語の短距離かき混ぜと同様に目的語が前置されている *wh* 疑問文の発話を探してみると、2歳頃から (10) のような発話が頻繁に観察されることがわかる。

- (10) a. what's Mommy doing? (Naomi, 1;11)
 b. what is daddy holding? (Nina, 2;02)
 c. Mommy # what you doing. (Peter, 2;01)

英語における *wh* 疑問文の獲得を踏まえると、もし短距離スクランプリングの獲得に4～5年ほどの期間が必要なのであれば、それは比較的獲得されるのが遅い属性ということになる。果たして本当にこの日本語の主要な特徴の1つは獲得にそれだけの時間が必要とされる知識なのだろうか。

2.2. Otsu (1994) および Murasugi and Kawamura (2005) による実験研究

Otsu (1994) は、Masunaga (1983) の研究に基づき、短距離スクランプリングを含む「～を～が動詞」の語順を持つ文では、文頭に置かれた目的語がすでに文脈において言及された情報、つまり旧情報を担っていなければならない点に注目した。Hayashibe (1975) の実験では、幼児に (7b) のような短距離スクランプリングを含む文が提示された際、これらの文は単独で提示され、文脈は与えられていなかった。Otsu (1994) は、この点を修正し、(11) のように短距離スクランプリングを含む文の前に文脈を形成する文を置くことで、前置された目的語が旧情報を担わなければならないという文脈上の制約が満たされた際に、幼児の正答率が上昇するかどうかを確かめた。

- (11) 公園にアヒルさんがいました。
 そのアヒルさんをカメさんが押しました。

実験は、12名の3歳児および12名の4歳児を対象に実施された。3歳児・4歳児各12名のうちのそれぞれ6名が実験群に分類され、残りの6名が統制群に分類された。実験群の幼児に対しては、(11) に例示されるように、文脈を伴った形で「～を～が動詞」の語順を持つテスト文が提示され、統制群の幼児に対しては、Hayashibe (1975) の実験と同様、(12) のように文脈が存在しない状態でテスト文が提示された。

- (12) アヒルさんをカメさんが押しました。

実験方法は、Hayashibe (1975) と同様に、動作法が用いられ、調査は1人ずつ実施された。この実験では、幼児が課題を理解するための練習文が4文(自動詞を含む文が2文と「～が～を動詞」の語順を持つ文が2文)、「～を～が動詞」の語順を持つテスト文が4文の計8文が各幼児に提示された。¹

得られた実験結果は、表2の通りであった。なお、「誤った解釈に基づく反応」とは、最初の名詞句を動作主として解釈し、2番目の名詞句を被動作主として解釈したことに基づく反応を指す。

	「～を～が動詞」の語順を持つテスト文に対する反応		
	正しい解釈に基づく反応	誤った解釈に基づく反応	自己中心的な反応
実験群	90% (54/60)	5% (3/60)	5% (3/60)
統制群	55% (33/60)	37% (22/60)	8% (5/60)

表2: Otsu (1994) による実験の結果

表2から明らかなように、Hayashibe (1975) の実験と同様に文脈なしの状態では「～を～が動詞」の語順を持つテスト文を与えられた統制群の幼児達は37%の割合で誤った解釈に基づく反応を示し、正答率は55%にとどまったのに対し、文脈を伴ってテスト文を提示された実験群の幼児達は、90%の正答率を示し、誤った解釈に基づく反応は5%に過ぎなかった。この結果は、適切な文脈を伴って提示される限りにおいて幼児は「～を～が動詞」の語順を持つ

¹ 自動詞を含む文の具体例は、残念ながら Otsu (1994) では明示されていない。実験方法として動作法を用いていることから、「走った」のように人形で動作が行いやすい自動詞であると推測される。

文を正しく解釈することができ、それはつまり短距離スクランプリングの知識がすでに3歳児・4歳児の母語知識に存在することを示している。

Hayashibe (1975) の実験および Otsu (1994) の実験の統制群において、誤った解釈に基づいた反応が現われたのは、幼児が短距離スクランプリングの知識をまだ獲得していないからではなく、短距離スクランプリングを含む文の使用を適切にするような文脈を自ら補う能力が幼児においてまだ未発達であったからであると考えられる。

なお、この可能性をさらに追及するため、本章第2部第3節でも述べるように、Murasugi and Kawamura (2005) による実験では、(13) に例示されるような能動文・受身文・短距離スクランプリングを含む文という3種類の課題文を用いた実験研究を行っている。(13a) の能動文および (13c) のスクランプリング文では、主格である「が」を伴った名詞句が「動作主」の意味役割を担っており、目的格である「を」を伴った名詞句が「被動作主」の意味役割を担っている。一方、(13b) の受身文では、主格である「が」を伴った名詞句が「被動作主」の意味役割を担っており、「動作主」の意味役割は「に」を伴った名詞句に付与されている。Murasugi and Kawamura (2005) は、これら3種類の文を実験に含めることにより、幼児の注意を格と意味役割の関係に向けようを試みた。その結果、このような実験上の工夫により文脈を与えなくとも2歳児の短距離スクランプリングを含む文の理解度が上昇することが明らかとなった。

- (13) a. アヒルが牛を追いかけた。 (能動文)
 b. 牛が₁アヒルに_{t₁}追いかけられた。 (受身文)
 c. 牛を₁アヒルが_{t₁}追いかけた。 (スクランプリング文)

Murasugi and Kawamura (2005) は、(13c) に示すような短距離スクランプリングを正しく解釈できる幼児が、短距離スクランプリングが照応形である「自分」を含む句に対して適用された (14b) のような文についても正しく理解できる点を、実験により確認している。

- (14) a. アヒルが 牛を [自分の庭で] 追いかけた。 (能動文)
 b. 牛を₁ [自分の庭で]₂ アヒルが _{t₂} _{t₁} 追いかけた。
 (スクランプリング文)

「自分」は通常、それに先行する名詞句を先行詞として持たねばならないが、スクランプリングを含む文においてはこの制約が移動した要素の元位置に適用

される。² 短距離スクランプリングの文を理解できる幼児が、(14b) のような「自分」を含む句にスクランプリングが適用された文においてその先行詞を正しく定めることができるのであれば、これらの幼児がスクランプリングという移動に固有の特性についても知っている可能性を示すことになるだろう。Murasugi and Kawamura (2005) および彼らの実験を改良した Isobe (2008) では、幼児がこのような知識もすでに持っている可能性を示唆している。

以上、本節では、幼児が持つ短距離スクランプリングの知識に関する実験研究を整理し、その知識が3歳あるいはそれ以前に獲得されていることを示唆する結果を概観した。次節では、長距離スクランプリングの知識がいつ頃から幼児に備わっているかについて調査した実験研究について議論する。

3. 長距離スクランプリングの獲得

日本語における長距離スクランプリングの獲得について扱った研究に、Sugisaki and Murasugi (2015) がある。本節では、その実験方法と結果について整理する。

Sugisaki and Murasugi (2015) の研究では、(15) のような文を用いて、幼児の母語知識の中に長距離スクランプリングが存在するか否かを調査した。

- (15) 誰にコマさんは [絵を見せてあげたいと] 言ったかな？

(15) の文において文頭に現れている *wh* 句「誰に」は、その元位置に関して2つの可能性を持つ。1つは、(16a) に示されるように、「誰に」は主節の動詞である「言う」の間接目的語であり、短距離スクランプリングによって主節の文頭へ移動している可能性である。もう1つは、(16b) に示されるように、「誰に」は埋め込み節の動詞である「見せる」の間接目的語であり、埋め込み節の内部から長距離スクランプリングによって主節の文頭へ移動している可能性である。

- (16) a. 誰にコマさんは [絵を見せてあげたいと] _____ 言ったかな？

² 正確には、照応形である「自分」は先行詞にc-統御される必要があるが、ここでは説明の便宜上、「『自分』の先行詞は『自分』に先行する名詞句に限られる」という条件を用いる。照応形とその先行詞との構造的な関係に関するより正確な議論については、高野 (本書) を参照して頂きたい。

- b. 誰にコマさんは [_____ 絵を見せてあげたいと] 言ったかな？

もし日本語を母語とする幼児の母語知識に長距離スクランプリングが含まれていないのであれば、(15) のような文が与えられた際、幼児はそれに対して短距離スクランプリングを含む (16a) の構造のみを与え、一貫して「誰に」を主節の動詞である「言う」の間接目的語として解釈するはずである。一方、もし日本語を母語とする幼児が長距離スクランプリングの知識を持つのであれば、(15) に対して、短距離スクランプリングを含む (16a) の構造および長距離スクランプリングを含む (16b) の構造の両方を与えることができ、幼児は「誰に」を主節の動詞である「言う」の間接目的語としても埋め込み節の動詞である「見せる」の間接目的語としても解釈できると予測される。

Sugisaki and Murasugi (2015) はさらに、日本語を母語とする幼児の持つ長距離スクランプリングに関する知識が成人の持つ知識と同質であることを保証するために、(17) のような文に対する解釈も調査している。

- (17) 何色でトゲニャンは [コマさんが描いた] 電車を塗ったかな？

(17) の文において文頭に現れている *wh* 句「何色で」は、(15) の文と同様に、その元位置に関して2つの可能性を持っている。1つは、(18a) に示されるように、「何色で」は主節の動詞である「塗る」と結びついた句であり、短距離スクランプリングによって主節の文頭へ移動している可能性である。もう1つは、(18b) に示されるように、「何色で」は埋め込まれた関係詞節に含まれる動詞である「描く」と結びついた句であり、長距離スクランプリングによって主節の文頭へ移動している可能性である。しかし、瀧田（本書）等で議論されている通り、成人の母語知識においては、このような関係詞節の内部から主節への移動は、移動に対する制約の1つである複合名詞句制約によって禁じられている。したがって、日本語を母語とする成人にとっては、(18) の文頭にある *wh* 句「何色で」は、主節の動詞である「塗る」と結びついており、短距離スクランプリングによって主節の文頭へ移動した構造（すなわち (18a) の構造）のみが可能となる。

- (18) a. 何色でトゲニャンは [コマさんが描いた] 電車を _____ 塗ったかな？

- b. 何色でトゲニャンは [コマさんが _____ 描いた] 電車を塗ったかな？

Sugisaki and Murasugi (2015) は、日本語を母語とする幼児が (15) においては文頭の *wh* 句を埋め込み節内の動詞と結びついた句として解釈する一方で、(17) においては埋め込み節（関係詞節）内の動詞と結びついた解釈を許容しないことを示すことで、幼児の言語知識の中に成人と同質の長距離スクランプリングに関する知識が存在することを明らかにしようと試みた。

Sugisaki and Murasugi (2015) では、4歳11か月から6歳11か月までの16名の幼児（平均年齢5歳10か月）を対象にした実験が実施された。16名の幼児は8名ずつの2グループに分けられ、1つのグループ（「実験群」）には、(19a) (= (15)) と (19b) (= (17)) のようなスクランプリングを含む文が提示され、もう1つのグループ（「統制群」）には、(19a) のようなスクランプリングを含む文と (19c) のようなスクランプリングを含まない文が提示された。

- (19) a. 誰にコマさんは [絵を見せてあげたいと] 言ったかな？
b. 何色でトゲニャンは [コマさんが描いた] 電車を塗ったかな？
c. トゲニャンは [コマさんが何色で描いた] 電車を塗ったかな？

この実験では、幼児に図1にあるような写真を見せながら (20) のような「お話」を聞かせ、その後 (19a-c) にあるような質問を提示した。幼児の課題は、これらの質問に答えることであった。

- (20) 「お話」の例：

コマさんとコマじろうは、妖怪保育園でクレヨンでお絵かきをして遊んでいます。コマさんは、「コマじろう、おらは、大好きな水色と緑色で電車を描いたずら。」と言いました。コマじろうは、「兄ちゃん、おらは大好きな茶色で電車を描いたずら。」と言いました。そこへ、いたずら好きのトゲニャンがやってきて、「水色よりオレンジ色の電車の方がカッコいいにゃ！」と言って、コマさんが水色で描いた電車をオレンジ色に塗ってしまいました。コマさんは言いました。「何するずら！まあでもこれはこれで確かにかっこいいずら。」そこへ妖怪保育園の先生がやってきました。コマさんは先生に言いました。「先生、見て！電車が上手に描けたずら。友だちのフミちゃんに見せたいずら。」

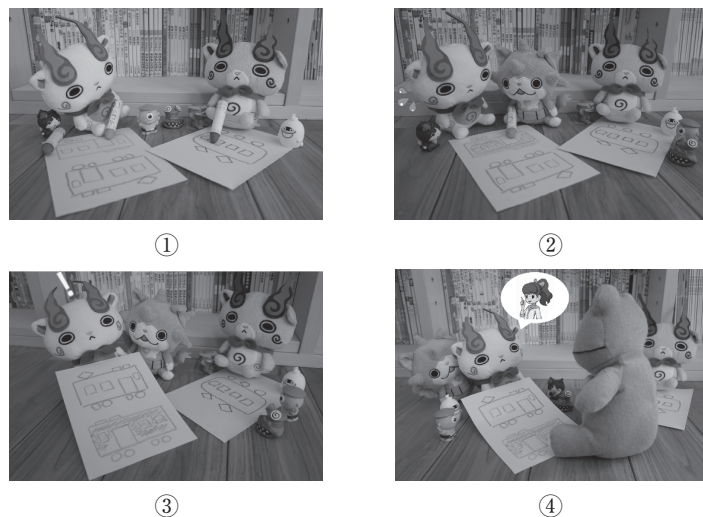


図1：Sugisaki and Murasugi (2015) の実験で用いられた写真

この「お話」の中では、(19a)の文に関しては、*wh* 句を埋め込み節内の動詞と結びついた句として解釈した場合の答えとして「フミちゃん」、*wh* 句を主節の動詞と結びついた句として解釈した場合の答えとして「妖怪保育園の先生」が与えられていた。また、(19b) および (19c) のような関係節を含む文に関しては、*wh* 句を関係詞節内の動詞と結びついた句として解釈した場合の答えとして「水色」、*wh* 句を主節の動詞と結びついた句として解釈した場合の答えとして「オレンジ色」が与えられていた。

得られた結果は、表3に示す通りであった。まず、(19a)のような文に関しては、表3に示される通り、ほぼ全ての幼児において、文頭の *wh* 句を埋め込み節内の動詞と結びついた句として解釈する強い傾向が見られた。「誰に」を主節の動詞の間接目的語として解釈した場合の答えは「妖怪保育園の先生」であり、埋め込み節の動詞の間接目的語として解釈した場合の答えは「フミちゃん」であったため、幼児が示した埋め込み節内での解釈への強い傾向は、おそらく他の登場人物（コマさん・コマじろう）と同様にアニメの登場人物である「フミちゃん」という答えを好んだことによるものと推測される。³

³ この推測が正しければ、お話に出てくるキャラクターに関する知識を持たない成人の場合には、文頭の「誰に」を埋め込み節の動詞の間接目的語として解釈する強い傾向は見られないことが期待される。この点については、今後の研究に残された課題のひとつとなっている。

テスト文		(19a) 誰にコマさんは [絵を見せてあげたいと] 言ったかな？	
<i>wh</i> 句の解釈		主節	埋め込み節
グループ	実験群	6.3% (1/16)	93.8% (15/16)
	統制群	0% (0/16)	100% (16/16)

表3：Sugisaki and Murasugi (2015) による実験の結果

一方、(19b) のような文が提示された際、実験群の幼児達は、文頭の *wh* 句を主節の動詞と結びついた句として解釈する強い傾向を示した。そして、(19c) のようなスクランプリングを含まない文を提示された統制群の幼児は、*wh* 句を正しく関係詞節の要素として解釈した。

実験群	テスト文	(19b) 何色でトゲニャンは [コマさんが描いた] 電車を塗ったかな？	
	<i>wh</i> 句の解釈	主節	埋め込み節
	結果	93.8% (15/16)	0% (0/16)
統制群	テスト文	(19c) トゲニャンは [コマさんが何色で描いた] 電車を塗ったかな？	
	<i>wh</i> 句の解釈	主節	埋め込み節
	結果	18.8% (3/16)	81.3% (13/16)

表4：Sugisaki and Murasugi (2015) による実験の結果⁴

これらの結果から明らかなように、(19a) のように移動の制約が適用されない文においては、幼児は長距離スクランプリングから生じる解釈を好む強い傾向が見られるのに対し、(19b) のように移動の制約が適用される文の場合には、制約に違反しない解釈、つまり文頭の *wh* 句が主節の動詞と結びついており、短距離スクランプリングによって文頭に現れている構造から生じる解釈を示す強い傾向が見られた。(19a) と (19b) に対する解釈の間に見られる差は、日本語を母語とする幼児が成人と同質の長距離スクランプリングに関する知識を持つことを示すものと言える。したがって、前節で議論した短距離スクランプリングと同様に、長距離スクランプリングに関しても、遅くとも4歳頃ま

⁴ 統制群において、埋め込み節内に含まれる *wh* 句を主節の要素として解釈したと思われる誤りが18.8%の割合で観察されている。これがなぜであるかについては疑問が残るが、幼児は集中力・注意力などが成人に比べて未発達であると考えられるため、およそ80%以上の正答率が得られた場合には、成人と同質の知識を持つと分析されることが典型的である。

では成人と同質の知識が幼児に備わっていると考えられる。

4. スクランプリングの獲得と普遍文法

第2節および第3節では、短距離スクランプリングおよび長距離スクランプリングの両方に関して、日本語を母語とする幼児が成人と同質の知識を獲得していることを示す実験結果を概観した。では、幼児はどのようにしてスクランプリングの知識を獲得するのだろうか。

もっとも単純な可能性は、日本語を母語として獲得中の幼児に向けられた成人の発話には、(短距離および長距離)スクランプリングの適用を受けた文が豊富に含まれており、幼児はそのような言語経験に接することでスクランプリングの知識を獲得するという可能性であろう。

しかし、この可能性は妥当ではないようである。韓国語には、日本語と同様にスクランプリングが存在する。Kang (2005) は、Cho (1982) の観察に基づき、韓国語を母語とする幼児が手にする言語経験において、(短距離および長距離)スクランプリングの適用を受けた文が非常に少ないことを報告し、それが幼児の(短距離および長距離)スクランプリングの獲得にとって直接的な手がかりにならないことを示している。

Sugisaki (2012) は、Kang (2005) に基づき、CHILDES データベース (MacWhinney (2000)) に収められている日本語幼児自然発話コーパスのうちの名分 (Aki と Ryo と Tai; Miyata (2004a, b, c)) を取り上げ、そこに収められている母親の発話に、どのくらいの頻度で短距離スクランプリングを含む文が現れるのかを分析した。その結果をまとめたものが表5である。

	幼児の年齢範囲	総発話数	SOV 語順		OSV 語順	
			発話数	%	発話数	%
Aki の母親	1歳5ヵ月-3歳0ヵ月	20828	58	0.278%	1	0.005%
Ryo の母親	1歳4ヵ月-3歳0ヵ月	7345	3	0.041%	0	0.000%
Tai の母親	1歳5ヵ月-3歳1ヵ月	47377	51	0.108%	2	0.004%

表5：幼児に向けられた発話における OSV 語順の頻度

表5に示される通り、幼児に向けられた発話には、短距離スクランプリング

の適用を受けて OSV の語順を持つことになったと思われる文はごくわずかしか観察されなかった。⁵ Aki の母親の発話においては1例、Tai の母親の発話においては2例のみ観察され、Ryo の母親の発話においては、スクランプリングの適用を受けたと思われる文は1例も観察されなかった。短距離スクランプリングを含むと考えられる3例は以下の通りである。

- (21) 幼児に対する母親の発話に含まれた短距離スクランプリング：
- Aki の母親：ここ誰が運転するの？
 - Tai の母親：これ誰が作ってんの、これ？
 - Tai の母親：これ Taisho が作ったの？

この結果は、Kang (2005) と同様に、母親の発話に含まれる短距離スクランプリングの情報のみに基づいて幼児が短距離スクランプリングの知識を獲得しているというもっとも単純な可能性を、幼児が手にする言語経験の観点から否定するものと解釈できる。

では、幼児はいったいどのような情報に基づいて当該言語がスクランプリングを許す言語であることを知るのだろうか。それは日本語のどのような特性と関わるのだろうか。

その答えを得るためにどのような研究が可能であろうか。例えば、幼児の発話に関する縦断的観察によって、スクランプリング文が産出されるようになるのと同時に、他のどのような統語的特性が観察されるようになるのかを綿密に調査することによって、そのヒントを見出すことができるかもしれない。例えば、野地 (1973-1977) の観察したスミハレは、2歳2か月頃に短距離スクランプリングを含むと思われる文を発話しているが、この時期は、「が」「を」といった格助詞が豊富に使用されるようになる時期でもある。語順が入れ替わった際に、名詞句に付随する格助詞がその文の解釈において重要な役割を果たしている点を考慮すると、格助詞の存在がスクランプリングを可能にしている特性であり、幼児は格助詞の存在を手がかりにスクランプリングを獲得している

⁵ 目的語が主語の前に前置された文のみならず、目的語が副詞の前に置かれた文 (例：ケンがリングをゆっくり食べた) も、目的語が副詞の後に置かれた文 (例：ケンがゆっくりリングを食べた) から、目的語に短距離スクランプリングを適用することによって得られると考えられている。そうであれば、幼児にとって、目的語が副詞の前に置かれた文も短距離スクランプリングの存在を示す手がかりになる可能性がある。しかし、オランダ語のような言語 (の埋め込み文) では、目的語は副詞の前に移動することはできても、主語の前には移動できないようである。このため、日本語タイプのスクランプリング (目的語を主語の前に移動させることのできるスクランプリング) の存在を明示的に示す証拠は、OSV の語順を含む文であると考えられる。

かもしれない。

また、基本語順を決定するために必要な言語経験が、その答えの鍵となる可能性もあるだろう。本書で紹介する生成文法理論は、ヒトには遺伝により生得的に与えられた母語獲得のための仕組みである「普遍文法」(UG)が備わっており、母語知識の獲得は、生後外界から取り込まれる言語経験とUGとの相互作用により達成されると仮定する。そして、このUGには、全ての言語が満たすべき制約である「原理」(principle)と、言語間の可能な異なり方を少数の可変部の形で定めた制約である「パラメータ」(parameter)が含まれている。

Saito (1985), Fukui (1993), Saito and Fukui (1998) などの研究によると、ある言語に(日本語タイプの)スクランプリングが存在しうるかどうかは、その言語が「主要部後置型」(head-final)の言語であるかどうかという点とパラメータによって密接に結びつけられている。「主要部後置型」の言語とは、英語のような「主要部前置型」(head-initial)の言語とは異なり、各種類の句の中で、中心となる要素が句の中で最後の位置を占める言語を指す。例えば、(22)に示されるように、英語では目的語の前に動詞が現われるのに対し、日本語では動詞は目的語の後に現れる。同様に、英語は前置詞を持つ言語であるのに対し、日本語は後置詞を持つ言語である。

(22) 主要部前置型言語 vs 主要部後置型言語

英語	日本語
ate sushi	寿司を <u>食べた</u>
from Nagoya	名古屋 <u>から</u>

Fukui (1993) や Saito and Fukui (1998) などが提案するように、その言語にスクランプリングが存在するためには、当該言語が「主要部後置型」でなければならないということがパラメータによって決定されているとしよう。その仮定に基づけば、日本語を母語として獲得中の幼児は、自分が獲得しようとしている言語が「主要部後置型」であるか否かを言語経験から学び、「主要部後置型」であるということを知ると、UGのパラメータの働きによってほぼ自動的に、当該言語にスクランプリングが存在しうるという知識を身につけることができることになる。では、日本語が「主要部後置型」であることを示す情報は幼児にとってどの程度手に入りやすいものなのだろうか。

この問いに答えるために、Sugisaki (2012) の研究では、先ほどと同じ3名の幼児自然発話コーパスにおいて、母親の発話の中に「名古屋から」のように

後置詞を含む発話がどのくらいの頻度で存在しているかを分析した。その結果をまとめたのが表6である。

	幼児の年齢範囲	総発話数	後置詞句	
			発話数	%
Aki の母親	1歳5ヵ月-3歳0ヵ月	20828	776	3.726%
Ryo の母親	1歳4ヵ月-3歳0ヵ月	7345	204	2.777%
Tai の母親	1歳5ヵ月-3歳1ヵ月	47377	1274	2.689%

表6: 幼児に向けられた発話における後置詞句の頻度

表5と表6の比較から明らかなように、スクランプリングの存在を直接的に示す文の頻度が0.1%にも達しないのに対して、「主要部後置型」であることを示す後置詞句は2.7%~3.7%と高い頻度で観察された。これらの結果から、日本語を母語とする幼児がスクランプリングの知識を獲得する際には、OSVの語順を持つ文に直接頼っているのではなく、スクランプリングの存在とパラメータによって結び付けられた他の顕著な性質(「主要部後置型」)の存在を確認することが引き金となっていることがわかる。したがって、幼児に向けられた成人の発話におけるスクランプリングの頻度に関する分析結果は、スクランプリングの有無を司るパラメータの存在に対し、母語獲得の観点から支持を与えるものと解釈できる。

5. 第1部のまとめ

本章では、日本語を母語とする幼児がすでに4歳頃の段階で、短距離スクランプリングおよび長距離スクランプリングの両方に関して成人と同質の知識を身につけていることを示した研究結果を概観した。さらに、幼児に向けられた成人の発話では、スクランプリングを含んだ文が非常にまれにしか現れないことを観察し、それに基づいて、スクランプリングの獲得にはUGのパラメータが関与している可能性が高い点について議論した。したがって、日本語におけるスクランプリングの獲得は、母語獲得に対するUGの関与に対して、日本語獲得の観点から証拠を提示する現象であると言える。

第2部では、スクランプリングが示すより抽象的な性質に関しても、日本

語を母語とする幼児が成人と同質の知識を身につけていることを示した代表的な研究について議論する。

第2部 幼児日本語におけるスクランプリングとその痕跡

1. 日本語のスクランプリングとその痕跡

スクランプリングのような移動操作は、その適用によって句を移動させた際、その句がもともと存在していた位置に痕跡 (trace) を残すと考えられている。この仮説の妥当性を理解するために、日本語の短距離スクランプリングが痕跡を残すことを示す証拠を2種類議論することにしよう。

1つ目の証拠は、数量詞遊離と呼ばれる現象に基づく証拠である。黒田 (1980) の観察によると、「3人」や「2つ」のような数量詞とそれが修飾する名詞句は隣り合っていないと見られる文法性の差は、短距離スクランプリングが痕跡を残すことを示す証拠の1つとなる。

- (23) a. イギリス人が3人うちでの小づちを買った。
 b. *イギリス人がうちでの小づちを3人買った。

しかしながら、(24b) が示すように、短距離スクランプリングの適用によって目的語が文頭の位置に移動し、目的語とそれを修飾する数量詞との間に主語の名詞句が介在することになったとしても、(23b) の文とは異なり、非文法的な文とはならない。

- (24) a. イギリス人がうちでの小づちを2つ買った。
 b. うちでの小づちをイギリス人が2つ買った。

Saito (1985) は、(23b) と (24b) の間に見られる文法性の違いが、痕跡の存在によって説明されうることを明らかにした。(24b) の文は、(24a) の語順に対して短距離スクランプリングを適用することによって得られるため、文頭に移動した目的語の名詞句がその元位置に痕跡を残しているという分析のもとでは、およそ (25) のような構造をしている。

- (25) うちでの小づちを₁ イギリス人が _{t₁} 2つ買った。

この構造では、目的語である「うちでの小づちを」の痕跡がそれを修飾する数

量詞である「2つ」と隣接しているため、「数量詞とそれが修飾する名詞句は隣り合っていないと見られる」という条件が痕跡によって満たされており、それにより (24b) が可能な文となっていると分析できる。したがって、数量詞を含む (23b) と (24b) との間に見られる文法性の差は、短距離スクランプリングが痕跡を残すことを示す証拠の1つとなる。

2つ目の証拠は、照応形である「自分」の振る舞いに基づく証拠である。日本語の照応形の1つである「自分」は、文内においてその先行詞となる名詞句よりも後に現れていなければならない、「自分」がその先行詞よりも前に現れてしまうと、(26) が示す通り非文法的となる。

- (26) a. ケン₁が[自分₁の弟が一番足が速い]と思っている。
 b. *自分₁の弟が[ケン₁が一番足が速い]と思っている。

しかし、「自分」を含む目的語に短距離スクランプリングを適用し、その先行詞となる主語よりも前へと移動させたとしても、(27b) が示すように、非文法的とはならない。

- (27) a. ケン₁が自分₁の弟を応援した。
 b. 自分₁の弟をケン₁が応援した。

(26b) と (27b) との間に見られる文法性の差は、数量詞の場合と同様に、痕跡の存在を仮定することによって説明が可能となる。(27b) の文は、(27a) の語順に短距離スクランプリングを適用することによって得られており、文頭に移動した目的語の名詞句がその元位置に痕跡を残しているという分析のもとでは、およそ (28) のような構造をしている。

- (28) 自分₁の弟を₁ ケンが _{t₁} 応援した。

(28) の構造では、照応形「自分」を含む名詞句の痕跡が、その先行詞である主語に後続しているため、「照応形はその先行詞よりも後の位置に現れなければならない」という制約が痕跡によって満たされていると分析されうる。一方、短距離スクランプリングを含まない (26b) の文は、この制約を満たすことができないために非文法的となっていると考えられる。したがって、照応形を含む (26b) と (27b) との間に見られる文法性の差は、短距離スクランプリングが痕跡を残すことを示すさらなる証拠となる。

以上、この節では、日本語の短距離スクランプリングが元位置に痕跡を残すという仮説を支持する2種類の証拠を議論した。次節以降では、日本語を母

語とする幼児が、果たしてこのような音声に直接的には反映されないような抽象的な要素についても成人と同質の知識を持つのかどうかについて調査した主要な実験研究について、その方法と結果を議論する。

2. 幼児日本語における短距離スクランプリングとその痕跡：その①

日本語を母語とする幼児の持つ母語知識における痕跡の存在に関して、前節で議論した数量詞に関する現象を基に調査を実施した主要な研究に、Sano (2007) および Suzuki and Yoshinaga (2013) がある。ここでは、より大規模な研究である Suzuki and Yoshinaga (2013) について整理を行う。

Suzuki and Yoshinaga (2013) の研究は、4歳2か月から6歳11か月までの33名の幼児(平均年齢5歳6か月)を対象に、(29)のような数量詞を含む文に関する幼児の解釈を調査した。これらの文では、「前足で」という句が存在することにより、(足を持つ)イヌが動作主であり、(足を持たない)ヘビが被動作主であることが明示的になっている。これにより、Otsu (1994) の実験のように文脈を与えなくとも、(29b) の文においても文頭にある名詞句が「被動作主」であることが幼児にとって明らかになるよう工夫されている。

- (29) a. イヌが前足でヘビを2匹叩きました。
b. ヘビを₁ イヌが前足で t_1 2匹叩きました。

(29b) の文は、(29a) の語順に対して短距離スクランプリングを適用することによって得られた文であり、文頭へと移動した目的語はその元位置に痕跡を残している。もし日本語を母語とする幼児が成人と同様に痕跡に関する知識をすでに持っているならば、(29b) の文が与えられた際、数量詞である「2匹」を目的語である「ヘビを」と正しく結びつけて解釈することができるはずである。一方、もし幼児が痕跡に関する知識を持たないのであれば、(29b) の文が与えられた際、「2匹」を最も近い名詞句である「イヌが」と結びつけて解釈することが期待される。

実験方法としては、幼児に2枚の絵を同時に提示し、テスト文と合致すると思われる絵を幼児に選択してもらうという方法が用いられた。(29) の場合には、1匹のイヌが2匹のヘビを叩いている絵と、2匹のイヌが一緒に1匹のヘビを叩いている絵が提示された。テスト文については、(29a) のようなSOVの語順を持つ文が6文、(29b) のようなOSVの語順を持つ文が6文、計12文が提示された。

得られた実験結果は、幼児がこれらの文の解釈において非常に高い正答率を

示すことを明らかにした。(29a) のようなSOVの語順を持つ文の正答率は91.4%、(29b) のようなOSVの語順を持つ文の正答率は86.4%で、これらの正答率の間に統計的に有意な差は見られなかった。したがって、Suzuki and Yoshinaga (2013) が実施した実験の結果は、日本語を母語とする幼児の持つ母語知識においても、成人の母語知識と同様に、短距離スクランプリングが痕跡を残していることを示したものと解釈できる。

3. 幼児日本語における短距離スクランプリングとその痕跡：その②

第1部の2.2節でも紹介したように、Murasugi and Kawamura (2005) の研究では、照応形「自分」を含む句が短距離スクランプリングの適用を受けた文を用いて、日本語を母語とする幼児がスクランプリングの痕跡に関して成人と同質の知識を持つか否かを明らかにするための調査が実施された。被験者は、2歳から6歳までの幼児22名であった。この実験で使用されたテスト文の具体例は(30)の通りである。

- (30) a. アヒルが 牛を [自分の庭で] 追いかけた。
b. 牛を₁ [自分の庭で]₂ アヒルが t_2 t_1 追いかけた。

(30b) は、(30a) の語順に対して、「牛を」という目的語の名詞句と「自分の庭で」という後置詞句の2つの句に対して短距離スクランプリングを適用することによって得られた文である。日本語を母語とする幼児が痕跡に関する知識をすでに持っているのであれば、(30b) の文において「自分」がその先行詞よりも前の位置に現れているにもかかわらず、正しく「アヒルが」を「自分」と結びつけて解釈することができるはずである。一方、もし幼児が痕跡に関する知識を持たないのであれば、照応形である「自分」はその直前にある名詞句である「牛を」と結びつけて解釈されると考えられる。

実験は動作法を用いて行われた。幼児には動物の人形およびそれぞれの動物の家と庭のおもちゃが与えられ、幼児の課題はこれらを用いて与えられたテスト文の通りに動作を行うことであった。幼児には計20文のテスト文が提示され、そのうち、6文が(30a) のようなSOV文であり、8文が(30b) のようなOSV文であった。⁶

実験結果によると、22名の幼児のうち、15名が(30a) のようなSOV文お

⁶ 残りの6文は受身文である。スクランプリングを含む文と受け身文の獲得に関する比較については、Murasugi and Kawamura (2005) を参照。

よび (30b) のような OSV 文の両方に関して、100%の正答率を示した。残り7名のうち、2名の2歳児は、(30a) のような SOV 文を正しく理解できなかったことから、照応形である「自分」の知識をまだ獲得していないものと考えられる。その他の5名のうち、2名については、SOV 文・OSV 文の両方に関して正答率が80%以上であった。つまり、「自分」の知識を身につけていると思われる20名の幼児のうち、17名が非常に高い正答率を示した。

上記の調査に対し、斎藤衛氏は以下の点に改善の余地があることを指摘している。(30a) の文では、「アヒルが」と「牛を」の2つの名詞句が「自分」に先行するにもかかわらず、先行詞になり得るのは「アヒルが」という主語のみである。これは、「自分」の先行詞となりうるのが主語に限られるという制約が存在するためであると考えられている。「自分」の持つこのような「主語指向性」を踏まえると、Murasugi and Kawamura (2005) が用いた (30b) のような文では、主語が1つしか存在しないため、仮に幼児が痕跡に関する知識を持っていなかったとしても、「自分」の先行詞が主語に限定されるという知識を持ってさえすれば、正答にたどり着いてしまう可能性がある。この可能性について、例えば Isobe (2008) では、(31) のように埋め込み文を含むことで主語が2つ存在している文を用いて調査している。

(31) [パンダさんが自分の大きなお鼻をたたいたと]₁ ぶたさんは _{t₁} 思った。

このような文が与えられた際、幼児が痕跡に関する知識を持つのであれば、「自分」の先行詞として主節の主語である「ぶたさん」を許容するはずであり、一方、その知識を持たないのであれば、「自分」の先行詞は同節内の主語である「パンダさん」に限定されるはずである。日本語を母語とする3歳5か月から5歳2か月までの幼児16名(平均年齢3歳11か月)を対象に調査を行ったところ、(31) のような文に対し、80.9%の割合で、「自分」の先行詞として「ぶたさん」を許容することが明らかとなった。

これらの結果は、照応形である「自分」を含む句が短距離スクランプリングの適用を受けた場合でも、幼児が痕跡を用いて正しくその先行詞を決定できることを示したものである。したがって、Murasugi and Kawamura (2005) および Isobe (2008) による実験の結果は、前節で議論した Suzuki and Yoshinaga (2013) による数量詞を用いた実験の結果と同様に、日本語を母語とする幼児の持つ母語知識において短距離スクランプリングが痕跡を残していることを明らかにしたものと言えるだろう。

おわりに

本章では、日本語を母語とする幼児がスクランプリングについて成人と同質の知識を持つか否かについて調査を行った主要な研究について概観した。まず第1部では、短距離スクランプリングおよび長距離スクランプリングのそれぞれに関して、実験を行うことで幼児の持つ知識が成人のそれと同質であることを明らかにした研究について概観した。第2部では、スクランプリングが適用された際に、移動した句が元位置に残すと仮定される痕跡について、それが音形を持たない抽象的な要素であるにもかかわらず、幼児がすでに成人と同質の知識を持つことを明らかにした研究について整理した。これらの発見は、幼児がスクランプリングの持つさまざまな属性を早い段階からすでに獲得していることを示すものである。第1部で確認した通り、幼児に与えられる言語経験には、日本語にスクランプリングが存在することを明確に示す発話がほとんど含まれていない。この観察を踏まえると、スクランプリングの獲得が早期に達成されるという発見は、母語獲得を支える生得的なUGの存在に対して日本語獲得からの証拠を提示するものと解釈できる。

参考文献

- Cho, Sook Whan (1982) "The Acquisition of Word Order in Korean," *Calgary Working Papers in Linguistics* 7, Department of Linguistics, The University of Calgary.
- Fukui, Naoki (1993) "Parameters and Optionality," *Linguistic Inquiry* 24, 399-420.
- 原田信一 (1977) 「日本語に変形は必要だ」『月刊言語』10月号, 88-95; 11月号, 96-103. [『シンタクスと意味: 原田信一 言語学論文選集』, 福井直樹(編), 2000, 545-566, 大修館書店, 東京.]
- Hayashibe, Hideo (1975) "Word Order and Particles: A Developmental Study in Japanese," *Descriptive and Applied Linguistics* 8, 1-18.
- Isobe, Miwa (2008) "Reconstruction in Child Japanese: A Preliminary Study," *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, ed. by Tetsuya Sano, Mika Endo, Miwa Isobe, Koichi Otaki, Koji Sugisaki and Takeru Suzuki, 205-215, Hituzi Syobo, Tokyo.
- Kang, Bosook (2005) "A Learnability Puzzle in Scrambling," *Proceedings of the 29th Annual Boston University Conference on Language Development*, ed. by Alejna Brugos, Manuela R. Clark-Cotton and Seungwan Ha, 331-340, Cascadilla Press, Somerville, MA.
- 黒田成幸 (1980) 「文構造の比較」『日英比較講座2: 文法』, 國廣哲彌(編), 25-61, 大

修館書店, 東京.

- MacWhinney, Brian (2000) *The CHILDES Project: Tools for Analyzing Talk*, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.
- Masunaga, Kiyoko (1983) "Bridging," *Proceedings of the XIIIth International Congress of Linguists*, ed. by Shiro Hattori and Kazuko Inoue, 455-460, Proceedings Publishing Committee, Tokyo.
- Miyata, Susanne (2004a) *Japanese: Aki Corpus*, TalkBank. 1-59642-055-3, Pittsburgh, PA.
- Miyata, Susanne (2004b) *Japanese: Ryo Corpus*, TalkBank. 1-59642-056-1, Pittsburgh, PA.
- Miyata, Susanne (2004c) *Japanese: Tai Corpus*, TalkBank. 1-59642-057-X, Pittsburgh, PA.
- Murasugi, Keiko and Tomoko Kawamura (2005) "On the Acquisition of Scrambling in Japanese," *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*, ed. by Joachim Sabel and Mamoru Saito, 221-242, Mouton de Gruyter, Berlin.
- 野地潤家 (1973-1977) 『幼児言語の生活の実態 I ~ IV』文化評論出版, 東京.
- Otsu, Yukio (1994) "Early Acquisition of Scrambling in Japanese," *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, ed. by Teun Hoekstra and Bonnie D. Schwartz, 253-264, John Benjamins, Amsterdam.
- Saito, Mamoru (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*, Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru (1989) "Scrambling as Semantically Vacuous A'-Movement," *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, ed. by Mark Baltin and Anthony Kroch, 182-200, University of Chicago Press, Chicago.
- Saito, Mamoru (1992) "Long-Distance Scrambling in Japanese," *Journal of East Asian Linguistics* 1, 69-118.
- Saito, Mamoru, and Naoki Fukui (1998) "Order in Phrase Structure and Movement," *Linguistic Inquiry* 29, 439-474.
- Sano, Tetsuya (2007) "Early Acquisition of Copy & Movement in a Japanese OSV Sentence," *BUCLD 31 Online Proceedings Supplement*, ed. by Heather Caunt-Nulton, Samantha Kulatilake and I-hao Woo.
- Sugisaki, Koji. (2012) "Poverty of the Stimulus in the Acquisition of Japanese Scrambling," Poster presented at Formal Approaches to Japanese Linguistics 6, ZAS, Berlin.
- Sugisaki, Koji and Keiko Murasugi (2015) "Scrambling and Its Locality Constraints in Child Japanese," ms., Mie University and Nanzan University.
- Suzuki, Takaaki, and Naoko Yoshinaga (2013) "Children's Knowledge of Hierarchical Phrase Structure: Quantifier Floating in Japanese," *Journal of Child Language* 40, 628-655.

おわりに

宮本 陽一・瀧田 健介

大阪大学 明海大学

言語学を科学として捉え、生成文法の研究を進めていく上での研究方法論が伝えられたとすれば、本書の目的は達成されたと言える。生成文法理論もミニマリストプログラムと称されるアプローチへと発展し、併合、素性の一致等の限られた、概念的にどうしても必要と考えられる操作だけを駆使しながら、言語現象を説明し、さらに言語間差異を捉えていくことを研究者は考えている。限られた道具立ての中で言語を正確に記述・分析していくことは容易な作業ではない。このような時期であるからこそ、データをより大切にし、分析対象とする現象の真の姿を浮き彫りにすることが重要であるように思う。データは必ずしもインフォーマントチェックから得られるものではなく、先行研究から得られる場合も多々ある。さらに、ミニマリストプログラム以前の先行研究を丁寧に読むことから得られる知見は数知れないのである。

例えば、生成文法の枠組みにおける日本語研究を振り返ると、研究にはサイクルがあることがわかる。日本語の詳細な研究があり、その研究成果をもとに言語間差異を扱う研究が可能になり、その研究成果があって、さらに日本語の研究が進むという流れである。80年代を例にとると、Hale (1983)の研究に続く Saito (1985)の研究、それに続く Fukui (1986)の研究があり、Kuroda (1988)の研究がある。この Fukui の研究から、日本語には機能範疇がないのかという問いが生じ、この流れを踏まえることによって Saito and Murasugi (1990)に始まる N' 削除の研究、および Takahashi (1994)以降のスルーシングの研究の意義が見えてくるし、この後の研究の方向性も自ずと決まるのである。さらに、Kuroda (1988)による日本語は一對多の一致を示す言語であるという主張は、スクランプリング、項省略等の具体的な分析の1つの方向性を示している。他言語との比較から新たな「なぜ」を問う仮説にも繋がっている。

また、先行研究は、理論研究と獲得研究の關係に目を向けることの大切さも教えてくれる。我々は生まれて数年の間に特に教育を受けることもなく、誰も